

身近な正義



例えば、街中で酔っぱらい同士が喧嘩していたとする。腕つぶしの強い人ならその喧嘩を制止することはできるだろうが、そうでない場合、我々は警官を呼んで仲裁に入ってもらわなければならない。例えば、「コンビニで何かを万引きした人間が店員の制止を振り切って逃亡したとして、それを追いかけて捕まえようとする人は稀であると思う。近くに警官がいれば、警官を促して万引き犯人を逮捕してもらうにちがいない。警官は国家権力を背景に武力を保持しているから、そういう法を犯す人間を制圧できる力がある。何が言いたいかと言うと、我々一般庶民にとって、警官とは一番身近な社会的正義の体現者であるということである。彼らは背中に「正義」と書かれた看板を背負っている。

だからこそそんな正義の体現者である警官が犯罪を犯すと我々はとても驚く。「警官が犯罪を犯すとは世も末だ!」と。世にある職業の中で最も犯罪に手を染めてはならない職業が警官である。いわゆる有名人でないにもかかわらず、市井(しせい)の警官による犯罪が有名人の不祥事同様に物議を醸すのは、そういう構造ゆえである。警官の犯罪はスキヤンダルになりうるのである。

ずいぶん前の映画だが、「ターミネーター2」(1994年)で悪役になるT-1000は警官の扮装をしている。正しくは警官を殺害したT-1000は、警官に化けるわけだが、多くの可能性を捨てて、作り手が化ける対象として「警官」という職業を選んだのは以上のような理由ではないか。警官の制服に身を包んだT-1000は、正義と真逆の殺人機械であるがゆえに痛烈な皮肉が利いているから。

高橋いさを

〈劇作・演出家〉